

障害との付き合い方

室蘭市医師会
日鋼記念病院

こん さおり
今 沙織

実家にはたくさん偉人の伝記があり、幼い頃よく読んだ。中でも、ヘレン・ケラーの『障害は不便だが、不幸ではない』という言葉は印象深かった。

成人してから度々病気に見舞われている。初期研修を終えて間もなく、交通事故で頭に大怪我をして、高次脳機能障害を患った。脳機能の約50%が失われ、もう医師として働けないと説明された。記憶を維持できず、職場・自宅・移動時を問わず常に大量のメモとともに生活している。同じ仕事をするにも人の3倍以上の時間がかかってしまう。交通事故の翌年には癌を告知され、手術と化学療法を受けた。手術の後遺症で、常に左半身の疼痛としびれがある。天気の良い日や寒い季節は特に、思わず悲鳴をあげる程の突出痛に襲われる。化学療法で体力は著しく落ちた。

リハビリや治療を経てなんとか仕事に復帰したものの、先に述べた弊害から、毎日結構な苦痛を感じている。プライベートも同様だ。医局や関連病院のスタッフさん、家族や友人に助けられながら、なんとか生活している。

一方で、この生活を経て得たものもある。

まず、日頃出会う人々の雰囲気をよく観察する癖がついた。スムーズに意思疎通を図れないときに、『うまく考えを表現できないのかも』『なにか心身に理由があるのかも』と発言を待つ気持ちの余裕が生まれた。診療において、以前は治療ありきと考えがちだったが、1人1人に適した方針をじっくり考えるようになった。特に悪性疾患においては積極的に治療を考慮すべきだが、治療にも長年付き合うことになり得る合併症がたくさん存在し、年齢や予後によってはBSCも選択肢に挙がる。最も患者さんが自分らしく生活できるのはどの方法か、よく話し合うようになった。

私の抱える障害は見た目にはわからない。普段使いのバッグにヘルプマークを付けているが、それでも行動に時間がかかっていると、冷たくあしらわれる事もしばしば。生きにくい毎日ではあるが、人生の試練は生きる上で大切なことを学ぶ場だと思っている。私にとって、『障害は不便だが、不幸ではない』の言葉を感じる場所である。ただし無茶はできない体なので、今後も自分の力量に見合った生活を送るよう心掛けたいと思っている。

世の助けが必要な方々への理解が広まり、生活しやすい社会になってほしいと日々願っている。

患者目線、患者家族目線

札幌市医師会
中田泌尿器科病院

いけしろ すぐる
池城 卓

他人様の体ばかり診てきましたが、40代も半ばに差し掛かり自身の身体にも気になるところや困るところが出てくるようになってきました。

自覚があるものとしましては夜トイレに起きるようになった、焦ってトイレに行くことが出てきた、などです。

問診中も密かに（わかるわかる、そうなんだよね）と思うことがあります。

また、昨年から痛風を発症してしまいました。飲酒量も減っており、運動の機会も増えつつあった矢先の発症でしたので釈然としないところはあったものの、生活習慣を省みる良い機会であったと思直しています。

昨年、私自身だけではなく小学生になる息子も病院のお世話になることができました。

私自身も何度となく執刀経験のある一般的な手術のための短期入院です。以前勤務していたことのある病院にお願いしましたので、不安は大いに緩和できたものと感じています。当日私は仕事でしたので息子に付き添っている妻と連絡を取り合いつつ手術終了を待っていました。今までで一番長く感じた2時間でした。

手術内容も治療をしていただく先生や看護師さんたちもよく知っている私でさえそう感じたのですから、一般の患者さんやそのご家族の不安、心配はいかほどのものか。改めて考え直すことができました。

息子本人は親の心配をよそに、短期であったこともあり入院は楽しかったと申しております。すっかり元気に走り回っています。

改めてお世話になりました札幌厚生病院の皆様から心からの御礼を申し上げます。

これらの経験を踏まえ、患者さん、患者さんのご家族の思いや不安を汲める医療を心掛けられればと感じております。